
まっさんが幻想入りシリーズ～永琳VS紫 囲碁3番勝負！～

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まつさんが幻想入りシリーズ〜永琳VS紫 囲碁3番勝負！〜

【Nコード】

N6915F

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

咲夜の休日に将棋を指していた彼女とまつさんは、偶然八意永琳と八雲紫が囲碁で対決する、といううわさを聞き、ちょっとのぞいてみようか、という話になる。対局場所は博麗神社。いつからこの神社はイベント会場御用達になったのやら・・・。

永琳VS紫 囲碁3番勝負！第一話（前書き）

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。

ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人は、お読みにならないほうがよろしいかと思います。

小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観についての誹謗中傷はご遠慮くださいますようお願いします。

あと、『紅魔館のメイドの休日』をお読みになってからこちらをお読みになったほうが、多少お楽しみ度がアップすると思われるので、『紅魔館の・・・』もよろしく願います。

永琳VS紫 囲碁3番勝負！第一話

咲夜は銀を手に取ると、相手の王将の腹に置いた。

対局相手の若い男は頭をかきむしり、しばし考え込む。

「うん、咲夜ちゃん強くなった。二枚落ちの手合いもこの辺ぐらいまでかな。負けました」

男は駒台に手を置くと、ペコリ、と頭を下げて投了した。

「ありがとうございます。で、これが必至？」

咲夜は自分の放った手筋を確認するために、上位者である男に聞いてみる。

「そうそう。俺がどう受けても、王様が逃げられないだろ？強い負けさせ方したよ。最初から感想戦しようか」

「そうね」

そんなやり取りをかわすと、二人は駒を元の位置に戻し始めた。

あーでもない、こーでもない、と二人が感想戦をしていると、幾人かの男たちがあちら側から少し興奮気味にしゃべりながらこちらへやってくる。

男・・・まっさんといって、幻想郷の人間たちの中で一番将棋が強い・・・の知っている顔だった。

「おい」

まっさんがその連中に声をかける。

「おう、先生」

男たちも、気軽に返事を返す。

彼らはまっさんに将棋を教わっている男たちだった。

「どこへ行くんだ？」

まっさんが聞くと、男の一人が気分よく教えてくれた。

「博麗神社で八意永琳と八雲紫が碁を打つらしくてさ。その観戦に」

「八雲紫・・・」

その名前にいい思い出がないまつさんは、少し顔をしかめた。

あの妖怪計算機め。

「先生が将棋の強いのはよく知っているけど、碁のほうはどうなんだい？」

娯楽の乏しい幻想郷ではいまだに、将棋と碁は二大ボードゲームとして結構な人気を博していた。

若いまっさんが先生、などと呼ばれているように、幻想郷で囲碁や将棋が強い人というのは、尊敬の対象なのである。

「へボだけど、一応打てるよ。碁か……。見に行くのも面白いかもな。咲夜ちゃんはどうする？」

誘われたのはいいのだが、咲夜は碁がなんだか分からない。

「ゴって？」

「将棋と同じ仲間の、ボードゲームさ。黒と白の石を使って、19×19マスの盤上の上で陣取りや石取りをするんだ。まあ、前にえーちゃんには世話になったし、応援がてら見にいこうぜ」

えーちゃんって。

親しみやすいというか、馴れ馴れしいというか。

そういえばまつさんと初対面のときも、いきなり呼び方が『咲夜ちゃん』だったのを思い出す。

ハンサムな彼は、良くも悪くも女性慣れしているのだろう。

「そうね、それも悪くないかもね」

「よし、決まりだ。俺たちもついていくぜ」

男たちに断る理由は何もない。

今日の対局相手のことを話題にしながら、彼らは対局場の博麗神社へと向かった。

博麗神社に着くと、まず『八意永琳VS八雲紫 激闘囲碁三番勝負』の横断幕が目飛び込んできた。

「……なあ、咲夜ちゃん。この神社はなんだ、幻想郷公式イベント会場にでも指定されているのか？」

幻想郷に来て一年ほどのまつさんは、それが前から不思議だった。半年に一度のミスコンも第2回からずっとここだし、祭りや今回のような催し物は、ここ博麗神社で行われることが多い。

そついやクリスマススの『プリズムリバー：クリスマス特別ライブ』もここだった。

大体、神社がクリスマスを盛り上げるようなことをしてよかったのだろうか。

「うーん・・・別にそういうわけじゃないと思うけど。お嬢様が聞いた霊夢の話だと、一回つぶれた神社の再建費用の借金を返すために、いろんなイベントを誘致してとりあえず人を集めてお賽銭と場所代を収入源にしているのだとか」

「なるほどな。わき巫女も色々大変なんだな・・・」

大変なのは分かったが、集金方法が大道芸人とほとんど変わらないような気もしてきた。

「芸だけ見てお金を払わない、というのは失礼だな・・・。ちよつと俺もお賽銭入れてくるよ」

基本的に無神論者の彼だったが、そんな話を聞いてしまうとなんだかお賽銭を入れないと、申し訳ない気分になってしまったのだった。

見学者の男女の割合はやはり男性のほうが多いとはいえ、4割ほどが女性だった。

まつさんが幻想郷に来る前に『同じボードゲームでも、将棋のカルチャースクールは商売にならないが、囲碁のカルチャースクールだと、むしろ女性のほうが多い』と聞いたことがある。

（まあ・・・将棋は勝負が激しいからな・・・）

将棋は終盤に向かうにつれて拡散していき流れが激しくなるが、囲碁は収縮型のゲームのため、割とゆつたりした終盤になりやすい。

そのあたりが女性や年配に囲碁が受け入れられやすい要因だ、と将棋好きや囲碁好きは分析している。

それに囲碁には『上品である』というイメージがどこかにある。

これは囲碁や将棋の持つゲーム性のイメージでなく、昔から上級階級の人間が囲碁を愛したからだ。

もちろん将棋好きの上流階級の人間が居なかったわけではないが、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕えたという伝説のある初代囲碁名人の本因坊算砂が、当時の上流階級に取り込み寵愛された、というのが大きい。

そしてその流れは現代に至るまで続いている。

江戸時代、囲碁将棋の名人所は奉行所が管理していたが、席次第一位はいつも囲碁名人であつたという。

全然東方と関係なくなってきた。

まあ、とりあえず囲碁にはそういった歴史背景があるのだ。話を戻す。

「お。あのちつこい女の子連れた姉ちゃん、かわいいなあ。咲夜ちゃん知ってる？」

まつさんはうずまきの刺繍が入った不思議な帽子をかぶり、上品に扇子で口元を隠している、青が基調の和服を着込んだ美女を指差した。

「ああ……。西行寺幽々子ね。白玉楼に住んでいる西行寺家のお嬢様よ。ちつこいほうは……。」

「俺はろりいの趣味はないから、そっちはいいよ」

「……。みよんファンに殺されても文句言えない発言をするまつさん。お嬢様なのか。うん、上品な感じがする美女だと思ったんだ。きつと碁を打てるから観戦に来たんだな。よし、お友達になつてこよう」

「え……。？」

ふんふん鼻歌を歌いながら幽々子に近づいていくまつさんに、咲夜は彼女が『死を操る程度の能力』を持っていることを伝えるタイミングを逸してしまった。

それよりあの馴れ馴れしい男が、いきなり妖夢に斬られないかの方が心配だったが。

「誰だ、お前は!？」

そう聞いてくる小さい女の子に、まっさんは

「幻想郷1将棋の強い男、スパイダーマ!」

などとふざけて返す。

「……」

有無を言わず腰の刀を抜き、まっさんに斬りかかる妖夢。

当然といえば、当然だった。

「うおっ! ちょ、ちよつと待った、待ったっ! いきなり斬りかかってくるやつがあるかっ!? 危ないちびっ子だな、おい」

「幽々子様に近づく怪しい奴は、斬る。それに私はちびっ子ではなくだな……」

「いや、どう見てもちびっ子だろ。それに俺は別に怪しくねえってホラ、あつこにいます咲夜ちゃんに名前を教えてもらってだな……」

まっさんはかくかくじかじか、身振り手振りを交えたり、幽々子の容姿を褒めたりしながら、色々弁明する。

「……つまり、幽々子様と一緒に暮を見学したい、と?」

「そうそう」

「どうします、幽々子様。この男、みよんなことを言っておりますが」

まっさんと妖夢のやり取りを、今まで黙って面白そうに見ていた幽々子が口を開いた。

「いいんじゃないかしら? あれこれ言いながら人の暮を見るのも、面白いでしょう」

「お、話が分かるね。俺はみんなからまっさん、なんて呼ばれている。よろしくな」

「私は西行寺 幽々子と申しますわ。よろしくお願いいたします」

幽々子はお嬢様らしく、上品に初対面の挨拶をした。

「幽々子ちゃんね。ゆゆちゃんでもいいかい?」

「……なにも知らない、というのは実にうらやましいことである。」

「き、貴様！幽々子様に向かってなんて口の利き方を・・・！」
まっさんの口の利き方に激昂してまた刀を抜こうとする妖夢に、幽々子はそつと手を伸ばしてその動きを静止する。

「面白いひとですね。ええ、私はそれでかまいませんことよ」

幽々子は扇子を口に当て、ほほほ、と上品に笑う。
男には二通りの男がいる。

警戒心を与える男と、警戒心を抱かせない男だ。

明るい笑顔で分け隔てのないまっさんは、典型的な後者のタイプだった。

女性に話しかけるときも、変な下心はまったく感じさせない。

・・・美男子でそれはずるい気もするが。

「咲夜ちゃんも呼ぶか。彼女、碁のルール知らないって言ってたけど、ゲームは好きみたいだから、雰囲気だけでも楽しめるだろ。おい、咲夜ちゃん。こつちおいで」

（結局仲良くなったんかい）

妖夢と幽々子、そしてまっさんのやり取りを遠めで見ていた咲夜はなんとというか、驚いた。

里でも彼は男女問わずに、結構な人気者である。

軽い物言いだが、うそは言わないし、彼は自分の発言に明確なルールを設けているようだ。

相手が誰でも、自分が正しいと思ったことは遠慮なく意見をぶつける。

彼は咲夜のために、あのレミリアにも食って掛かったことがあった。もちろんこつちにやって来て1年ほどの彼が、幻想郷の住人の怖さを知らない、というのもあるのだろうが。

（ま、友達が増えるのは悪いことじゃないしね）

咲夜はそう思い、手招きされたほうに足を運ぶ。

「お久しぶり、幽々子さん」

言葉どおり久しぶりに顔をあわせた幽々子に、咲夜は型どおりの挨拶

拶を送った。

「お久しぶりね、咲夜さん。紅魔館の歴々はご健勝かしら？」

「ええ、おかげさまで」

別に仲が悪いわけでもなかったが、幻想郷の中の人間と妖怪の関係なんて、こんなものである。

仲が悪くなるほどの付き合いもない、と言うのが正直なところだろう。

「少し気になったのですけど。あの面白い殿方とあなたは、どういった関係ですか？」

面白そうに幽々子が咲夜に聞く。

扇子で口元を隠しているの、そう質問する幽々子の表情を全部読み取るとはできなかったが、口調は嫌味を感じさせなかったので、純粹な興味からの質問らしかった。

咲夜がなんて答えようか迷っていると・・・。

「棋友だよ。咲夜ちゃんが休みのときは、よく一緒に将棋を指すんだ。結構強いぞ、咲夜ちゃん」

妖夢のことをよーちゃん、なんて呼んでまた刀を振り回されていたまっさんが、今日の天気を話すような口調で咲夜の代わりに答える。「・・・そうでしたの。趣味を通じた友人、というのは長く付き合えるものですから、大切にしたいものですね」

今度は少し、何かを含んだような笑みを漏らす幽々子。

咲夜はそんな幽々子の発言にも、特に表情を変えることはなかったが。

続く

永琳VS紫 囲碁3番勝負！第一話（後書き）

さて。

タイトルが『永琳VS紫 囲碁3番勝負！』なのに、ご両人ともまったく出てこないという、素敵な第一話になりました。

・・・石投げないでください。

今回はいろんな複線を張ってみました。

たとえばまつさんがレミリアに噛み付いた話とか、プリバーのクリスマスライブの話とか。

このあたりは今年中にSSにしてアップしたいと思っていますので、少しでも期待して待ってくださるとうれしいです。

あと・・・。

もう万人に私のSSを評価されるのはあきらめました。

一部の人でも、私の話を面白いなあ、と感じてくれたらそれでいいや、と。

実は私の中にも、私のSSは相当東方観を外しているな、という感覚があります。でも、東方観を外しているから面白くない、ってことはないはずなんですよ、どれだけ外しても、面白いものは面白いと感じさせる作品を見たので・・・。

まあでも・・・冷静に見直すと、やっぱり万人受けする話じゃないよな・・・とは思います。

色々書き散らしていますが、どの作品も未完のまま放っておく、ということはないので、皆さん温かく見守ってくださいたらなあ、と思っています。

ではまた、次回作でお会いしましょう。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻樂団様：<http://www.16.big.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

東方求聞史紀

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方が気になってファミコン以来久しぶりにシューティングで遊びました。面白いですよ）ですので、気になった方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弹幕型格闘ゲーム（?）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。
こちらもぜひ、プレイしてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6915f/>

まっさんが幻想入りシリーズ～永琳VS紫 囲碁3番勝負！～

2010年10月10日12時00分発行